

田恒興には大坂・尼崎・兵庫の一二十石が与えられた。そして、政務は秀吉・勝家・長秀・恒興の四人があたるように誓書がかわされた。この時期、利家・成政は、いまだその分国支配に専念せねばならなかったのである。

第三節 上杉・佐々の抗争

一、成政の越中統一へ

信長没後の 魚津城を攻め、落城させた織田勢ではあるが、信長が本能寺の変で没すると、柴田・佐久間・越中 状況 前田氏はそれぞれ自らの分国へ帰陣してしまった。成政も富山城へ帰ったものと考えられる。

その後の越中は「彼分国之義、無正体之由候、当州之儀先以佐内藏在国候、雖然彼内輪未落居之体候、此節太守於御出馬者、都鄙可属御本意候」(東京大学史料編纂部所蔵 伊佐早文書)という状況であった。これに対するように上杉方の越中国人の唐人式部は安城を手に入れており、関東・信濃・甲斐の諸侍も上杉方に一味するとの風聞があった。景勝は越後在国の能登畠山左近将監の望みに任せて、能登の地を宛行あてかおうとしており、また景勝は六月に数多くの知行宛行・安堵を給与しており、戦局の見通しで彼の心は広がっていたようだ。

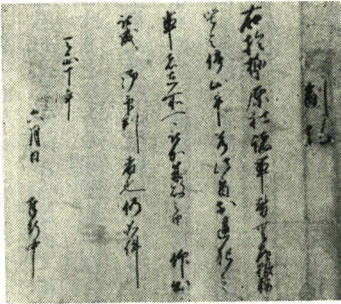
湯原国信は京都における信長滅亡の確実なることを報じて、六月十日には成政が富山より軍勢をいれて、小島甚介・寺島牛之助らと戦っていること、小島・寺島勢は敗北し、佐々勢は湯原陣まで近寄ったが、湯原勢は佐々勢を戦い破ったことを述べている。そして、これに乗じて景勝の越中出馬があれば、佐々勢も失地して越中は上杉の手のものになるだろうということであった。松倉の須田満親も直江兼続あてに景勝の出馬を待って兵を動かされるようにと

述べている。そして景勝自身も佐渡の本間氏あてに越中・能登の諸将が上杉方に再び復したため、越中出馬の決意を述べている。しかし既述のごとく、能登では石動山・荒山の戦いで旧畠山家臣は敗退しており、この時点で能登は前田利家の支配下におさまったと考えられる。

さて富山城へ帰陣した成政は、すぐに自分の支配している地域の強化と、对上杉勢への守備にとりかからねばならなかった。まず六月二十四日に新川郡本郷あてに禁制を差し出し（富山市五機二岡、崎野一氏蔵文書）、更に翌日には婦負郡長沢蓮華寺あてに同じく禁制を出している。また配下の神保氏張は六月日付で射水郡手崎町あてに制札を与えている（『小杉町史』）。その文言は「たう町いち如前々あひたてへきの事、おしかひ（非買）・らうせきすへからさる事、百姓等にひふんのやから申かくへ（非分）からさる事」というもので、これは勝俣鎮夫氏が述べている中世的世界の安堵、また楽市令のような市場という公界の安堵（『戦国法成』立史論）ともいえるもので、この町・市に関しての制札発給権は先に神保長住がもっていたものと考えられる

が、長住の失脚とのかかわりの中で氏張が発給したものである。上杉方も、景勝は六月に滑川（なまりかわ いちほら）の櫛原神社あてに制札（滑川市常盤町、且尾嘉文氏蔵）を与えて、支配地の懐柔などにそれぞれ余念がなかったようである。

ところで、越中新川郡弓庄城主土肥政繁の去就が上杉・佐々両勢力から注目の的であった。土肥氏家臣有沢図書助は主の政繁を上杉方にくみするように説得した。土肥氏の上杉方への帰属については、六月二十七日に松倉城將須田満親が新川郡高野の内の館分二〇か村を、その功を賞して有沢図書助あてに与えている（加越能文庫、有沢文書）。この文言の中で、同じ土肥氏の家臣の栃屋・中切氏へも知行地内での分与が認められているので、政繁―有沢―栃屋・中切という土肥氏家臣構成が想定できる。また須田は



櫛原神社あての上杉景勝制札

七月四日に安辺入道あてに小井手地内のうちを知行宛行しており（東京大学史料編纂所蔵、志賀橋太郎氏所蔵文書）、この安辺入道と同一人物か一族と思われる安辺彦五郎あてに天正九年（一五八二）二月七日付で、河田禅忠が「小出内森田分」を与えており、越中における上杉方の闕所地（けつしょ）の知行発給権は河田・須田へと継承されていることがわかる。ただし、寺社への禁制・制札発給権は景勝が保持している。上杉関係の知行宛行文書に「進置」と「出置」の文言がみえ、「出置」は被官関係のあるもの、「進置」は被官関係のないもの、寺社への寄進などに使用されている。例えば、須田満親は有沢図書助あてに「進置」とあるが、土肥政繁は有沢あてに「出置」とあり、これは有沢の土肥氏・須田氏への被官関係によるものである。

成 政 戦 闘

天正十年（一五八二）七月に、成政は越後境西浜新地まで兵を進めて、越後乱入の機会をうかがっていた。当時景勝は森長可退去後の信濃へ進攻していた北条氏直との対峙のために信濃へ出陣していて、春日山には留守であった。そこで景勝は岩井備中守を春日山へ派遣し、須田満親へもその心得・対処を命じている。ところで、越中国人の神保昌国・斎藤信利・神保信包・唐人親広・寺島信鎮らは七月五日付の連署状（歴代古案五）で越中の情報を知らせて、益前に越中へ出陣されれば、越中はもちろん能登・加賀まで上杉の手に落ちるだろうと述べ、景勝の越中への出馬を要請しているが、信濃の状況からそれはできなかった。景勝は七月には信州の仕置をして、八月にはかねてからの越後内の敵対者である新発田重家を攻めようとしていた。しかし新発田を討つことはできず、十月には春日山に帰って、来春の出馬を期した。

景勝は八月に吉江長忠あてに、魚津城の攻防で戦死した亡父景資・兄長秀の所領を安堵しており（東京大学史料編纂所蔵、吉江文書）、木の舟の汚名挽回とばかり戦死した吉江氏は、そのかいがあつて所領が安堵されたことになる。

九月には成政は小出地内を包囲し、また、上杉にくみした弓庄城へも攻撃の手をのべたが、土肥はその手をはら

い、退散せしめている。このおり土肥氏の人質が成政の手にかけられた。景勝は有沢図書助あてに、松倉の須田満親と相談して佐々勢と対峙することを指示している。このように、越中での戦局は混沌として大きな変化はなかった。十二月に景勝は斎藤五郎次郎・唐人親広あてに上国の形勢を問いただしており、かくて天正十年（一五八二）はすぎでしまう。

二、秀吉と勝家の確執

上杉と秀吉 手を結ぶ

清洲会議の継嗣問題のあと、秀吉と勝家の対立は決定的なものになった。秀吉は秀勝とともに十月十五日に大徳寺で、棺には木像をいれて信長の葬儀をとりおこない、天下に信長亡きあとの後継者であることを示そうとした。丹羽長秀・細川藤孝・忠興・筒井順慶・中川清秀らは秀吉にくみして、畿内及びその周辺が秀吉の影響下に固まりつつあった。

秀吉に敵対していた織田信孝は、勝家と秀吉打倒を画策して秀吉を包囲するために毛利氏にも働きかけ、十一月には吉川元春に誓紙を送ってよしみを通じていた。もはや秀吉と勝家の対戦は時間の問題であったが、勝家が前田利家を使者として秀吉の許に送り、講和をはかろうとしたのは十一月二日のことである。秀吉は、それは時間かせぎのため、降雪期で勝家の出兵がままならぬための方便だと察知して、虚をついて十二月九日に柴田勝豊の長浜城を包囲して誘降し、美濃に兵を進めて岐阜城の信孝を包囲した。信孝は孤立無援となり、三法師をさしだして秀吉と和を結んだ。秀吉はこの三法師を安土に移して、天正十一年（一五八三）正月には姫路城で年頭の祝詞をうけるにいたったのである。ところで、十一月二十一日に備後にいた足利義昭は、上杉景勝をして柴田勝家と呼応させて京都へ出兵して秀吉を追討せよとの書状を上条宜順・須田満親あてに出している。しかし景勝はこれに応ぜず、翌年二月には景勝か